
キズナミギ ―絆美義―

桐谷瑞香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キズナミギ ― 絆美義 ―

【Nコード】

N2764N

【作者名】

桐谷瑞香

【あらすじ】

奈美は部活動の波木山登山の日に、不思議な赤い糸と遭遇する。人と人の繋がりを表すそれらが、部員同士のいざこざと同時に、次々と切れるのを目撃した。そして彼女は、謎の青年伊沢と共に、絆の象徴である赤い糸を元通りにしようと奔走し始める――。

神聖な山を舞台とした現代青春短編小説。

一、波木山（前書き）

まず拙作に目を留めて頂き、ありがとうございます。

本作品はほんのりファンタジーも入っている、青春小説となっています。

連載小説の形式を取っていますが、そこまで長くない小説となっていますので、お気軽にお読み頂ければと思います。

では、読者様に少しでも爽やかな気分になって頂けますように――
|。

一、波木山

遙か昔、ある山には繋がりを大切にしている神様が降り立ったと言っ。

その神様はすべての人々の心が繋がることを願ったが、それは一人では難しいことだった。

そこで、その神様はまた別の二人の神様を産み落とすことにした――。

* * *

朝目覚めると、微かな光が目の中に入ってくる。それに刺激されて、糸川奈美はゆっくりと起き上がった。

カーテンの隙間から漏れていた光は弱々しく、窓の外はどんよりとした雲で覆われている。幸か不幸か、数日間続いた雨は昨夜のうちに止んでおり、道路も少しずつ乾き始めている状態だ。

外の様子を眺めていたが、しばらくしてから窓に背を向けて、携帯電話を取り上げた。その時、視界に入ったカレンダーには今日の日付に？登山？とはつきりと書かれている。それに関して、何か連絡はないかと受信メールを確認したが、中止や延期を促すようなものだけでなく、登山関係の連絡は一切入っていなかった。

「せめて雨の次の日は滑りやすいから気をつけるように、ってくらいメールで流しなさいよ」

いつものことではあったが、少し気の使い方がなっていないことに溜息を吐く。

秋も深まる季節、今日は奈美が所属している大学の部活動で、親睦を深めることを一つの目的としている登山が行われる。波木山と

なみぎさん

いう、大学から一時間程度バスで離れた所にある、標高約千メートルの山に毎年登っているのだ。

奈美にとってはもう三回目の部での登山。体を動かし、自然を肌で感じられる登山は好きで、いまだに楽しみにしている行事である。だが、今回はいつもとは違っていた。

夜から胸の動悸が治まらず、胸騒ぎがしてならないのだ。どこか体もだるく、気分が乗らない。もしかしたら、みんなの足に合わせず歩けないかもしれない恐れもあった。だから、今日登らないという連絡をほんの少し期待していたが、世の中上手くいかないものである。

目覚めてからまだ数分しか経っていないのに、再び溜息を吐く。そして肩にかかるくらい黒髪を振り払いながら、奈美は登山に適した服を引っ張り出し、そして机の上に置いてあった矢をリュックに入れながら、家を出る支度を始めた。

* * *

「おい、目的地に到着したぞ。みんな、バスから降りろ」

朝も早かったため、バスの中でうとうと眠りについていた奈美を起こしたのは、同じ三年生であり、部長の高瀬秀の声であった。その声はいつもよりぶっきらぼうで、どことなく苛立ちを感じとれる。そんな彼の様子を気にして立ち止っていたら、隣で座っていた友達の関根由宇に早く降りるよう促されたため、慌ててバスから降りた。

バスから降りた瞬間、ひんやりとした空気がまず奈美たちを出迎える。バスは登山口の近くまで走らせたのか、目の前には壮大な山が目に見え、飛び込んできた。

波木山は他の山と比べると、さして高い山ではない。だが、それ

でも人間の視線と比べればかなり大きく、迫力がある。また入口から少し進んだ所にはロープウェイがあり、ハイキング気分を手軽に登り降りできる山として、近年登山客を増やしているのだ。

山のほとんどが木々で覆われており、道中がどうなっているかはさすがにここからはわからない。入口は小さく、その先には鬱蒼とした森が続いていた。まるでこの先は危険であるから、くれぐれも注意して進むようにと呼びかけているようにも思えた。

初めて来る一年生たちが歓声を上げているのに対し、思わず笑みを浮かべていると、秀が山をじつと見ながら、短い黒髪を手で掻いている。

「はあ、奈義さんたちの代もまたこんなことを行事なんかにして……」

ぶつぶつと呟きながら嘆息を吐いていたが、すぐに気合いを入れ直すかのように表情を一転させて、みんなに声を投げかけた。

「静かにしてくれ。さて、これから登山を開始する。途中で休憩も入れるが、基本的には登り続け、昼を頂上で取り、それから下山して帰宅だ。何か質問はあるか？」

特に質問はなく、首を横に振る。それもそのはずで、登山前にミーティングをしているため、すでに質問をする内容は出尽くされているのであった。

秀は二十人以上もいる集団をざっと見渡して何もなかったことを確認すると、踵を返して入口へと向かい始めた。他の人々もそれぞれ促し、促されながら、歩を進ませる。奈美も周りの流れに合わせて歩き始めた。

ふと意識を自分自身に戻すと、後ろの方から鈴が鳴り響いている。後ろを振り返ると、奈美のリュックから矢が飛び出していた。ああ、これも今回の目的の一つであったのだと改めて思い出す。

先日の部室の大掃除で奈美が見つけてしまった破魔矢。いったい何年前なのかは定かではないが、埃をたっぷり被っており、買ってから数年も経っているのは目に見えていた。そこら辺で処分するわ

けにもいかず、この矢を買った波木山の頂上にある神社に納めに来たのだ。

なるべく鳴らないように、鈴の部分は布で覆ったはずだが、まだ微かに聞こえるくらいまで鳴り続けているらしい。しかし特に周りの人が気にしている様子はないため、このままの状態に登山をすることにした。

登山口に着くと、おもむろに道の先を見上げた。木々の間からは細かい光が漏れている。いつもはむしろ眩しいくらいだったはずなのに、いったいどうしたことだろうか。天気があまり良くないものもあるが、それでもどこことなく暗かった。首を傾げつつも、奈美は波木山へと足を踏み入れる。

だが今まで感じた様々な疑問は一瞬で吹き飛ぶ。

山の中に入った瞬間、奈美の視界には異質なものが広がったのだ。赤い糸のようなものが一面、至る所に飛び出していた。あるところでは、その糸の量が半端ではなく、もはや布と言ってもいいかもしれない。触ろうとするが、空を切ってしまい、何の感触も残らなかった。

「奈美、何しているのよ。早く進みなさいよ」

少し茶色に染めた長い髪を結んでいる由宇が、呆然と立ち尽くしていた奈美に進むよう促す。いつもと話している調子が変わらない彼女に、奈美は目を丸くした。

「え、見えないの？ この奇妙な空間を」

「何を言っているのよ。毎年登っている山の風景と同じじゃない。早く歩きなよ。後ろが詰まっているから」

「わ、わかった」

由宇に突かれながら、そろそろと続く集団の後ろに付き、不慣れな土の上を歩き始めた。だがそれ以上に衝撃的なことであつたため、そんなことを気にする余裕はない。

視界に広がるものは何かの見間違いだと思い、何度か目を擦ったり、まばたきをしたりして、改めて見てみたが、変わらず赤い糸は

蔓延していた。

奈美は少し前を歩いている由宇を覗き見た。機嫌がいいのか、ほのかに笑みを浮かべて、隣にいる後輩と話をしている。この明らかにおかしい様子が見えていないのか。

顔が青ざめつつも、奈美は視線を先に進んでいる集団へと移した。だが、すぐに逸らしてしまう。

一面赤い糸。異質すぎる空間。

一応、確認のために、言葉を選びながら、周りの人に何か奇妙な光景が広がっていないかと尋ねる。しかし奈美の心の叫びに反して、誰もが首を傾げていた。

何が何だか分からなく、気分が悪くなりそうだ。引き返したいと思ったが、歩き始めてしまった今では、それは難しいだろう。

最低限の防衛策として、なるべく視線を下げながら、その糸を見ないようにした。

しかし、何気なく緑が広がっている森の方を見ると、そこに赤い糸はなかったのだ。その光景に目を丸くして、再度、人々の背中がある正面を見ると、依然として糸はあった。

眉をしかめながら、その現象に首を傾げる。だがよく見てみれば、その糸は人々の体を中心として出ており、それが他の人へと繋いでいるかのように伸ばされていた。だから人が密集している所では糸が濃くなっているのだ。

——この赤い糸は、人の周りにしか出ていない？

あまりの不可思議な出来事に対して、極力冷静になって出そうと思った奈美の推測だ。その推測が正しければ、なるべく視線を人からそらし、木々や地面の方に向ければ、この状況を上手く乗り切るはずである。

登山に対する後ろめたさが、少しでも前に向けられた。

だが、そんな明るい感情はすぐにかき消される。

小さな音が耳の中に飛び込んできた。何かが切れた、不可解な音が。

その音の出所を見ようとすると、速度を調整しながら先頭を歩いていた秀の背中にぶち当たる。そして彼の背中を見て、目を瞬かせた。

彼からも赤い糸が出ているが、それがぴんつと張っている状態ではなく、出ていない方の部分が重力に従って落ちているのだ。そんな糸の様子は初めて見る。

その様子が気になり、歩調を速めて、秀に近づこうとした。一方、その秀に対し、同学年である山浦広樹も近づいている。普段は秀と一緒にくだらないことで盛り上がっている彼であるが、今は酷く機嫌が悪そうな表情で迫っていた。疑問に思いつつも、よく見れば赤い糸が垂れ下がっていることに気づく。

広樹が隣に着くと、秀に向かって何かを話し始めた。するとみるみるうちに秀の眉間にしわが寄っていく。始めは落ち着きがあった会話であったが、次第に熱くなり、声を荒げ始めている。お互いの表情も険しくなり、緊張感が漂い始めた。

後ろで雑談していた人たちも穏やかならぬ雰囲気気付いて、見上げている。

やがて、事件は起こった。

広樹が秀の肩を軽く押す。何かの会話の最中にそれとなく出てしまったものだろう。だがそれをきっかけとして憤慨した秀が広樹の頬に向かって、拳を向けたのだ。

その反動で、広樹は足場を崩され、その場に転んでしまう。秀は鼻息を荒く吐きながら、再び歩き始めた。しかし、すぐに起きあがった広樹によって、殴り返される。

それをきっかけとして、二人は殴り合いを始めた。

攻めようとすればかわし、守ろうとすれば攻められるなど、絶妙な具合での攻防が、次々と入れ替わりながら進んでいく。時に足を滑らせつつも、お互いにやめようとはしない。

人々は固唾を吞んで、成り行きを見守っていた。だが、時間が経つにつれて、攻撃が相手に当たるようになり、二人の顔や全身にあ

ざがで始めると、さすがに傍でおろおろしていた後輩たちが何人かでまとめて、その喧嘩を止めに入る。拳が体に当たろうが必死に制止を試みていた。

それを眺めながら、奈美は溜息を吐いていた。

——こんな道が悪い中で、しかも登り途中で喧嘩を起こすなんて、何て考えが無い行動を。お願いだから、早く終わって。二人ともこの場を考えてよ！

声に出して叫んでしまいたいと思ったが、そんな度胸はない。そつとその想いは胸に秘めておく。

やがて、数人がかりで、どうにか二人を引き離した。離れた今でも息は荒く、鋭い目つきでお互いを睨み合う。

冷静に物事を見ている人はその付近にはいないのか、宥め、事情すら聞こうとはしない。由宇に仲裁を頼もうとしたが、彼女は他の人と遠目から眺めているだけだ。しかたなく、肩をすくめながら奈美は近寄った。

「秀も広樹も何をしているの。ここは公共の場。他の人も大勢通っている道なのよ？」

半ば飽きれ気味に言う。ただでさえ、奇妙なものが視界に広がって気分も辛いのに、これ以上面倒なことを起こされるのは、ごめんである。

だが、そんな奈美の気持ちなどお構いなく、秀と広樹が次々と噛みついてきた。

「これは俺たちだけの問題だ。放って置いてくれ！」

「そうだ。秀が悪いのにどうして俺までそんな言われ用をされなければならぬんだ」

「何だと、広樹？」

「ああ？ 先に仕掛けてきたのはお前だろ！」

また二人は手を出そうとしている。その姿を見て、もう勝手にしてくれと言いたくなっていた。

しかしいつまでも立ち往生をしていては、様々な人に迷惑がかか

つてしまう。それを打破するために、どうすればいいのか考えこんだ。

そんな中、秀を抑えていた手が緩む。それを好機と捉えた彼は、無理矢理拘束を解いて、いまだに動けなくされている広樹の頬に拳を一発入れた。

その瞬間、周りから秀へ冷たい視線が集まる。それに奈美が気づいたのと同時に、秀の周りにあった赤い糸が大量に切れた。

秀ははっと顔色を変えて周囲を見渡す。そして何か言いたそうではあったが、それを飲み込んで背を向ける。視線を背中で浴びる形となって、一人山へと駆け登り始めた。

見る見るうちに彼の背中小さくなっていく。かなりの距離が空いてしまった後で、秀と親しかった数名の男子部員たちは大急ぎで後を追いついて、彼らもすぐに見えなくなってしまった。

二、糸川と伊沢

「秀、いったいどうして……」

「放っておけよ、あんなやつ」

振り返ると、眉をしかめている広樹の顔が真正面にあった。頬は腫れ上がっており、痛々しそうである。

「確かに秀が先に仕掛けたから、あっちの方が罪としては重いけど

――」

「重いけど？」

「広樹が先に何か変なことを話しかけて、突き放したでしょ？」

正直、そのことを広樹に聞くことには、多少の躊躇いがあった。冷静になれていない彼が果たして答えてくれるかどうか、疑問だったからだ。

「変なことつて、別にたいしたことじゃない」

「そう……」

予想通りの返答に、視線を地面に向けた。すると秀の携帯電話が落ちているのに気が付いた。それを拾い上げ、土を払った。いつも先生や部員と連絡を取り合っている電話。それがなければ、もし秀を追いかけた部員たちが出会えなかった場合には、連絡が取れない状況になってしまう。

視線を広樹に向けたが、すでにそっぽを向いている。もう秀のことなど、どうでもいいということなのか。

二人は常にお互いを高める存在であり、良い意味で好敵手。切磋琢磨にやる姿は周りも刺激を受けていた。

その二人の関係がこんなところで終わっていいはずが――ない。

ぎゅっと携帯電話を握りしめた。

そして道の先を見た。

この山の頂上は一つであるが、その前にいくつか分かれ道がある。どこを通っても地図があれば頂上に辿り着くことができるが、それ

その道の道によって距離は違うし、一度分かれてしまったらしばらくは合流できない。つまり登りも下りも、他の人と出会わない可能性もあるのだ。だから一人でも多くの道を手分けして秀を追いかけるべきである。

「行きたければ、行けばいい」

突然、奈美に対して言葉を投げてきたのは広樹。だがその表情は覇気がない。

「もういいだろ、行事とか、親睦を深めるとか。適当に仲のいいやつと数人で、勝手に登って、勝手に降りればいい」

「それじゃあ、この——」

登山は何のために始まったのよ、と奈美は言おうとしたが、部員たちの周りにある糸が次々と切れたことに、気がいつてしまった。そして部員たちは思い思いの人たちと一緒に進み始めてしまう。広樹も奈美など放っておいて、歩き始める。

「奈美、早く行こうよ」

女子の集団で固まっていた由宇が話しかけてくる。

「けど秀が……」

「放っておけば、そのうち出てくるって。そういうものでしょ」

その言葉を聞き、周りの無関心さに気付いて、奈美は立ちすくんでいた。

一つの団体ではある。だがどこか繋がっていない団体。

それをまざまざと見せつけられて、愕然としていた。

どうにかしたいと心の底では思った。しかし、部内でもさほど影響力のない奈美が発言しても動かないだろう。ならば、先に手を出してしまった人間ではあるが、部長の秀を捕まえるのが一番いいのではないか。

その考えに至ると、足が動いていた。少し先に進んでいた個々のまとまりの間をすり抜け、決死の思いで駆け登る。ぬかるみに足を取られそうになったが、そこは頑張って踏み止まった。

自分のペース以上で登っているため、すぐに呼吸が乱れる。それ

にも関わらず、行けるところまで全力で進む。なぜならば、なるべく早く部員たちから離れたかったのだ。

いつしか奈美の目にはうつすらと涙を浮かべていた。だがそんな様子に気付かず、ひたすら駆け登る。そして分かれ道の所で、予定のルートではない右の方に逸れた。

やがて奈美は広樹たち、後方の集団が見えなくなるところまで、登っていた。

周りを見れば木々が勢い良く伸び盛り、風が草木を揺らしている。鳥のさえずりも聞こえてきた。人間の話し声などなく、一種の幻想的な雰囲気漂う。

歩調を通常の速さに戻しながら、少し周りの景色を味わいながら見ていた。

だが突然、おかしいものが視界の隅に入ってきた。視線の焦点をそこに向ける。

その瞬間、奈美の顔が引きつった。

少し先に進んだ道に、一人の青年がいる。黒髪が爽やかに風によつてたなびき、サングラスを掛けている。顔が見えないためはつきりと言えないが、二十代半ばくらいだろうか。だが、それより顔より下が問題であった。なんと、アロハシャツを着て、ズボンも丈が短いラフなものを着て立っているのだ。

赤い糸を見たのとはまた別の衝撃が奈美の体の中を走り抜ける。

こんな山奥に、海に行くような格好をしている人は見たことがない。そんなのお構いなしに、青年は奈美に気がつくと思いついてきた。

「おや、お嬢さん、そんなに血相を変えてどうしたんだい？」

見知らぬ人にたやすく言える心情ではない。それにこんな場違いな服を来た人など、それだけで引いてしまう。目を伏せて、さりげにその脇を通り抜けようとした。だが、彼の次の言葉には思わず立ち止まってしまった。

「赤い糸でも見たのかい？」

立ち止まり、振り返ると、青年はにこりと笑った。

「どうやら図星のようだ」

そう言うと、サングラスを外し、奈美をじろじろと見回してきた。奈美は少しずつ近寄ってくる彼に警戒をしつつ後ずさりをする。

「おや、そんなに警戒しないでくれ。別に僕は怪しいものではない」

「こんな場所で、そのような格好をしていて、その上自分で怪しいものではないって言っているのを、真に受ける人がいますか！」

「けど赤い糸を見て、困惑した状態なのだろう？　僕は知っているよ、その糸のことを」

糸の存在を話題に出されて、息を呑んだ。ずっと頭の中で回っている、突然現れたあの糸の存在。もし少しでも何かを知っているのなら、それは聞き出したい。

「ふむ、少しは信用してくれたようだね」

「信用はしていません。ただ聞いた内容によっては考え直します」あくまで奈美自身の方が優位に立とうとした。だが、状況によっては一目散に逃げようとは決めている。

青年は腕を組みながら、少しだけ距離を取って立ち止まった。

「まあそういうことにしておこう。ああ、まずは自己紹介だね。僕は伊沢^{いざわ}。よろしく」

悪意のない表情を浮かべていた。その姿に思わず心を許してしまいがちだが、必死に引き留める。伊沢は若干肩をすくめながら話を続けた。

「さて単刀直入に言うと、赤い糸は人と人の絆を繋ぐものだ」

「絆？」

「そう、人と人は目に見えないが、糸のように繋がれていると言われている。その結び合いを絆と呼んでいてね。それを具現化したものが、君が見えていた赤い糸」

伊沢は自分の体から出ている赤い糸を指で示すと、それがまるで生きているかのように、奈美へと近づいてきた。避けようとしたが、

むしろ奈美から出ていた赤い糸がそれを受け入れようとしている。あつと言つ間にその二つの糸は結びついた。

「ほら、これで僕と君は見知らぬ人から、少し関係が持ったように変わったんだ。より親しい仲になれば、この結びつきは強くなる」

突然の事実を聞いて、啞然としてしまう。内容が現実味を帯びなさ過ぎて、上手く理解ができない。

「けど、こんなの私、今まで見たことがなかったのに！」

「見え始めたのは、波木山に入ってからではないのかい？」

「そうですね……」

「この山の中で糸が見える人がごく稀にいるらしい。この山はもとと古くから様々な伝説が言い伝えられている神聖な場所。そのような場所では、奇怪なことが見えやすいのだよ」

そういうことならば、何故山に入ってから見えたのかということには納得がいく。だが、もう一点腑に落ちないことがあった。

「仮にそうだとしても、私はこの山に登るのは三回目なんですよ？ 今までは見えたことがなかったのに、どうして今年は……」

伊沢はちらりと奈美を眺める。途中で目を細めたが、すぐに質問に答えた。

「まあ見えるか見えないかは、その人のその時の状況や持ち物で変わるらしい。ただ、よく言われているのは、その見えるという現象は偶然ではなく必然的に起こること。この山に入ってから、何かおかしいことはなかったかい？」

そう尋ねられると、すぐに秀と広樹のことが思い浮かんだ。あの出来事をおかしいと言っているのかわからないが、奈美にとっては普通ではないと思っていた。

「どうやら何かあったようだね。それが原因だろう」

「つまりおかしい出来事と赤い糸の出現には、関連があるということですよ。それなら、赤い糸をどうにかすることで、その出来事は解消できるのですか？」

何を言っているのだらうと、思わず失笑してしまう自分もあった。

だが、どうにかしてあの状況を打破したいという思いが強くなっている。可能性があるのなら、聞き、試してみる価値はあるかも知れないと思ったのだ。

伊沢は意外にも奈美の食い付きがよかったのか、少し嬉しそうである。それを見ると、何故か癪に障った。

「何ですか」

「いや、いい推測だと思う。赤い糸の繋がり、つまり絆の繋がりを戻すということでもいいのかい？」

「……そういうことになりますね」

仲のいいコンビである秀と広樹の関係、そしてバラバラになってしまった部としてのまとまりを戻したい。奈美は自分自身では力はないと思っている。だからこそ目の前に突き付けられた好機をしっかりと使いたいのだ。

正直に言ってしまうえば、空を掴むような話で、まったく無茶なことだと思う。だがそんな気持ちを伊沢は笑いもせず、ただ意外な言葉で返してきた。

「ねえ、それに対して僕もお手伝いしていいかい？　いくつか心当たりがあるんだ」

気が付けば、伊沢は奈美の近くにまで寄っている。微笑みながら近寄ってくる彼がいた。

「人手が多い方が、助かると思うけど？」

「出会って間もない人に、頼むのは――」

「いいんだよ。旅は道連れ、世は情けって言うだろう？　僕としては、赤い糸と絆の因果をはっきり見てみたいんだ」

「あれだけ言いきっているのにも関わらず？」

「仮説と実際は違うんだ。だから、お願い、手伝わせて」

そして頭まで下げられた。そこまでされては、断りにくくなってしまう。だが本音を言ってしまうえば、断る理由があまりない。むしろ知識や情報を得ているこの人といったほうが、何かといいことがあるだろう。

やがて何度か頭の中で試算をし、頭を上げさせると、奈美は口元を緩めた。

「糸川奈美です。変なことをしたら、すぐに蹴り落としますからね。しばらくの間、よろしく願います」

「蹴り落とされるのは嫌だなあ。するときはお手柔らかに願います」

軽口を叩きながら、白い歯がきらめいた。

三、紡糸川

少しだけ奈美の表情に赤みが戻り、笑みを浮かべる。それと同時にポケットが振動し始めた。取り出すと、奈美の携帯電話が点滅している。先ほど分かれた由宇からの着信であった。慌てて電話に出る。

「もしもし」

『奈美？ 今、どこにいるの？』

「今は周りに目印がないからはつきり言えないけど、途中の三つの分かれ道は右に行つて、少し歩いた所にいる」

『右？ そうか、私たちは左に進んでいる。先に秀を追いかけて行った人たちは真ん中の道に進んだらしいから、みんな違う道を通つたみたいね。まだ秀は見つかっていないから、そっちの方は任せた。何かあったら連絡ちょうだいね。それじゃあ——』

「ちよつと待つて！」

切ろうとした彼女に対して、静止の言葉を投げかける。

「広樹の様子は、どう？」

言つた瞬間、鼓動が急に速くなる。聞いてしまった後悔もあつたが、聞かずにはいられなかった。

『広樹なら多少不機嫌そうな顔をしているけど、普通に話はしている。まあ秀と会つたらわからないけど』

「そうか、ありがとう。ちよつと気になつただけだから。——それじゃ、またね」

由宇が電話を切るまで、じつと耳を当て続ける。やがて切れたコール音が響くと、奈美も通話を切つた。

熱を帯びている電話だったが、なぜかそれ以上の温かみも感じられたのだ。

「いいお友達をお持ちのようだね」

腕を組みながら、伊沢は待っていたようだ。

「まあ、いい面もありますけど、彼女、お節介の方が多いんですよ。――さて、これからどうすればいいのですか？」

気持ちを即座に切り替えて、自分のやることを明確にする。秀を見つけることももちろんだが、できるなら赤い糸を修復したい。

「僕が聞いた話によると、赤い糸はある人が結びを作っているそうだ。その人に会えば、どうにかなるかもしれない」

「その人ってどんな人なのですか？」

「さあ、僕は噂として聞いたことがあるだけで、具体的にはわからない。けど実在するらしいから安心して。さて、まずは手がかりがあると言われている、川まで目指そうか」

「どこにあるのですか？」

「この先を道なりに進めばある。さあ、行こう」

伊沢にそつと促されながら、奈美は歩を進め始めた。だが、まだ完全には信頼したわけではないので、多少の距離をあける。

道は今まで歩いた道と同様にぬかるんでおり、歩きにくい。その上、徐々に斜面も付き始めたのだから、なおさらだ。足下には十分注意をして、手も使いつつ、着実に登る。

一方、伊沢は海に行くような服装でありながら、そんなことも感じせずに進んでいく。それを見て、奈美は乾いた笑いを出す。

「今更な疑問なのですが、あなたはいったい何者ですか？」

「僕はただの通りすがりの登山者。山を純粹に愛し、海も大好きな青年さ。この山も何度も登ったことがある。……あ、今、僕のことを変人だと思ったでしょう」

「はい」

遠慮などせず、そのまま本音を出した。だがそれが返って奈美への印象をよくしてしまったらしい。怒りもせず、笑顔である。

「素直でよろしい。まあこんな恰好で登山なら何回かしたことはあるから、心配しなくていいよ」

「誰も心配していません。ただあなたが転がり落ちたら、こちらが迷惑だけです。気をつけてください」

「ご忠告ありがとう。優しいね、奈美ちゃんは」

ちゃん付けで呼ばれて、頬に熱が帯びる。

「初対面に近い人に、そんな呼び方しないで下さい！」

「それじゃあ、奈美りんがいい？ 奈美っちでもいいけど」

「そんな風に口を開く余裕があるのなら、早く進んで下さい。遅いです」

そう言いながら、奈美は伊沢の横をすまして抜かそうとした。だが彼はそれを遮るかのように、慌てて足の回転を速める。その行動に首を傾げたが、多少はこの山の地理関係に不安があったので、先に行って道を示してくれるのなら、それはそれでいい。

それからは伊沢が何気ない話題を持ち出してくるのを、奈美が突っ込んだり、切り捨てたりといった会話が繰り返られていた。まったく変な人と出会ってしまったと思ったが、内心はこういうどうでもいい会話が少し楽しい。

部活内の三年生と言えば、四年生はほぼ引退の身であるため、実際に部を引っ張っていかねばならない代。後輩たちを指導しつつ、自分たちも練習をするため、いつも気を張っていないければならなかった。また頼られるのは嬉しいが、言葉を押しとどめて耐えなければならぬ時期もあるので、自由には動けない。

だが、今はそんなことを気にする必要はないようだ。見知らぬ人で少し一歩下がって接しているが、気を使わなくてもいいという風に会話からして感じられる。

やがて急な勾配が続いた後、再び平坦な道が続く途中で、どこからせせらぎが聞こえてきた。伊沢の足の進みが若干速くなり、それとともに奈美も駆け足気味になる。

そしてそこに探していたものがあった。岩と岩の間から少しずつ流れ出る水。それが徐々に集まり、一本の川となっているのだ。

「これが言っていた川ですか？ こんな川、初めて見ます」

率直な感想をこぼすと、伊沢は顔をほころばした。

「この道は一番歩きにくい場所だし、脇道だからあまり人は通らな

い。ほら、雨が降ってぬかるんでいるからわかると思うけど、今日通った人はまだいないだろう？」

そういえばと思い、通ってきた道を振り返る。伊沢の後ろをただ付いていただけだったのでその時はわからなかったが、時折ある石の段差に靴の跡がなかったのを思い出す。そして歩きにくかったという事実も全然気づかなかった。

——もしかして、この人はそれを考慮して先に進んで、歩きにくさを気にさせないために、たくさん話しかけてきた？

伊沢を改めて見たが、彼はさっきまでいた場所にはいなく、気が付けば川の水を無邪気に触り始めていた。その姿は青年というより、少年という方があっている。純真無垢で自分のことしか考えていない様子だ。

「私に気を使いながら進んでいたなんて、それはないか。ただのお調子者なだけね」

奈美は自分の考えをあつさり捨て去った。

とにかく少しでも手がかりを得ようと、川のすぐ傍にまで寄る。すると伊沢が場所を空けてくれた。

「この川は紡糸川ほうしがわと言った。冷たくて、気持ちいいよ」

嬉しそうに流れ出る水を触っている。それにつられて、奈美も触れてみた。

ひんやりしており、ほんの少し触れただけで、指先から全身にかけて、一気にその冷たさが駆け抜ける。

自然と心が和んでくるその水の誘惑にかられて、気が付いたら両手ですくい、口の中に入れていた。

体内に入った瞬間、全身が清められたような気分になる。ただの湧き水であるはずなのに、それ以上のものであるように感じられた。「この川、あまり知られてはいないけど、ここをモチーフとした和歌があるらしいよ」

「どんなのですか？」

「正確には覚えていないけど、糸を紡ぐことと時が経つにつれて深

まる絆を合わせた感じだった。いやあ、昔、少しかじった時に知った話だから、間違っているかもしれない」

「和歌が作られたということは、昔から魅力的な川なのですね」

音だけを聞いていても心地がいい。見ているだけでも、心が穏やかになる。癒しの効果がある川なのかもしれない。

感慨深くふけていると、隣ではその水を何度もすくい上げて飲んでる人がいた。その人を呆れた顔をしながら横目で見る。

「それで、この川と糸は何が関係あるのですか？」

伊沢は口元を拭いながら、立ち上がる。

「この川の上流に行けばさらなる手がかりがあるらしいけど、今回は水を頂くつてところで終わりかな」

「はい？」

目を丸くする奈美など気にせず、伊沢は背負っていたリュックサックから、ペットボトルを取り出し、水を入れ始めた。透明のボトルに、見る見るうちにあの神聖な水が入っていく。ただのペットボトルが違ったものに変わっていくようだ。やがて満杯になると、満足そうにキャップを閉めた。

「あの、それを――」

「はあ、これで飲み水が確保できた！」

それを聞いた瞬間、奈美は拳を握りしめる。そして険しい表情をしながら、ゆっくりと近づいた。その異変に気付いたのか、伊沢は慌てて首を何度も横に振った。

「じよ、冗談だって！ この水が必要なんだよ、糸を繋ぐためには。ほら何でも神聖なもので清めてから、何かを行うじゃないか」

「それは本当のことを言っているのですか？」

「本当だって！ そのために空のボトルを持ってきたんだよ。もしこれを飲もうとしていたら殴ってもいいから、信用してくれ」

目で必死に訴えられ、さらにそこまで言われては、さすがにこれ以上何かをすることはできない。奈美は自分の拳を開き、表情を緩める。そして殺気から逃れた伊沢は胸を撫で下ろした。

緊張も緩んだところで、伊沢はペットボトルをリュックに入れて、道の先を指で示した。

「さあ、次の場所に行こうか」

「どこですか？」

「岩さ。この神聖な山にぴったりで素敵な岩があるんだ」

そして伊沢はまた先に歩き始めた。奈美はやれやれと思っていると、またポケットが振動していることに気づく。秀を追った男子の一人であった。伊沢が立ち止まって、出ると促している。それに感謝をしつつ、通話ボタンを押した。

「もしもし、糸川です」

『奈美さん？ 秀さん、見つかりましたか？』

「いえ、まだ。そっちはいた？」

『全然見つからないです。かなりペースを上げて登っているのですが、影すら見あたらなくて』

「分かれ道が多いから、すぐに見つからなくて当然よ。合流するまでは、そっちのほうをくまなく探してね」

『わかりました。見つかったら連絡します！ あと奈美さん、足下には気をつけて下さいね。さっき派手に転んだやつがいたから』

「私は大丈夫よ。そっちこそ気をつけてね。それじゃ」

通話ボタンを切ると、表情を緩めた。わざわざ心配して連絡してくるとは、嬉しいものだ。現実的な状況は変わっていないように見えるが、他の場面では何かが変わろうとしているのは垣間見えた。

四、繫累岩

紡糸川を飛び越え、伊沢まで近づくと、彼も再び歩き始めた。

ここから先の道は、緩やかな道が続くところもあるが、基本的にはアップダウンが激しい登り坂である。適度に休憩を入れて、水分補給をしながら進んだ。

一方、伊沢は多少息が切れているものの、あまり疲れたようには見えない。意外に体力があるのだなと感じてしまう。山が好きというのはあながち嘘ではないみたいだ。

ふと、平坦な道が続くところで、時計に目をやる。

気が付けば他の部員たちと分かれてから、二、三時間ほど経過していた。奈美自身が先に単独で行動をし始めたのにも関わらず、それを気にしてくれる部員たちがいて少し明るい気分になれる。

本当は赤い糸なんか存在してなく、すべて幻想であり、あの秀と広樹の殴り合いも何かの間違いだったのかもしれないと思えてきていた。

「奈美ちゃん、君の体の左から出ているもの、見える？」

しばらく黙っていた伊沢が急に奈美に話しかけてきた。それを聞いて、恐る恐る視線を下ろす。そこには赤い糸があり、他と結ばれるのではなく、棚引かれていた。それを見て、愕然とする。

「物事は根本をどうにかしなくては、解決にはならない。まだ糸はほとんど切れたまま。電話一本で感情を左右されない方がいいよ」

その言葉にむっとした。鋭い目つきで伊沢を見る。

「何ですか、その言いぐさは。少しは上向きにいつていると思って悪いですか」

「いや、悪くないよ。ただ、数回の声のやりとりという、上辺だけで判断するのは危ないと言っただけ」

「それでも何かを言ってくれることが嬉しいじゃないですか。言葉として出してもらうことが嬉しいんですよ!」

吐き出した後で、すぐに我に戻った。こんな出会って数時間しか経っていない人に、言うことではない。それに他の人にも言ったことがない想いを口に出すなんて。

後悔しながら地面を見つめ、立ち尽くしていると、伊沢が顔を曇らせて歩み寄ってきた。

「ごめんね。変な風に言い返して。けどそういう風に、本音をはっきり口に出すのもいいと思うよ」

「はつきり言うことがすべての最良のことではありません。——早く行きましよう。糸が繋がって、部が元通りに戻るのなら、それでいいのです、私は」

表面的な感情をきっぱり言いのけて、伊沢の顔を見ると憂いの表情をしていた。だがすぐにそれはなくなり、にこりとしながら、背を向ける。

「そうだね、わかった。それじゃあ、進もうか」

深く追求することなく、前に進むことを促してくれた。その背中が少しずつ小さくなっていく。それを小走りで追いかける。それと同時に、なぜか乱れた心が落ち着いていった。

雄大な自然の景色を楽しみつつもひたすらに上を目指す。

時々見る景色として印象に残ったのは、樹齢何百年とも言える木であった。その巨大な木の周りは苔で覆われており、歴史を感じさせるものがある。過去から今まで佇んでいたその木は、きつと未来までも見守り続けていくのだろう。

しばらく歩いていると、視界に木々だけでなく、苔や草などで覆われた何かが見えてきた。

「ほら、次のポイントの岩だ。もう少し近づいてみよう」

その岩はやがて奈美の視界以上のものとなって、目に飛び込んできた。五メートル以上の高さはあろう大きな石が道の左右にある。

そして上の方を草木が繋ぎ止めていて、アーチ上になっているのだ。

「これは繋累岩けいらいわというんだ。繋ぎ留める岩という意味」

「けいらい……。岩と岩を繋ぐもの」

ゆつくりと観察をしながら、真下まで移動して、顔を上に向けた。緑で覆われた頭上。その隙間から漏れ出る、太陽の光。強固に繋がれた緑。

岩に触れてみると冷たいが、むしろ落ち着くような感じである。

「元は岩と岩で繋がれていたらしいけど、壊れてしまったらしいんだ。だけどその前に草木が両岩を繋いでいたから、今も繋がっているように見えるわけ」

「すごいですね。こんな状態になっても繋がりを意識しているなんて……。それで、この岩のどこが手がかりなのですか？」

幻想的で綺麗ではあるが、それから何が導かれるかはよくわからない。まさかこれを通り抜けるだけで、解消されるとか、そんな簡単な話ではないと思う。

「ねえ、奈美ちゃんはカメラを持っている？」

「持っていますけど」

「ちよつと貸して」

訝しげに思ったが、素直にデジカメを伊沢に渡す。もしかしたら写真を撮ることで、何かが写り、その何かが関係あるのかもしれない、と言い聞かせた。伊沢が岩全体をレンズに納めようと、後ろに下がっている。それを見た奈美は岩から離れるために、通り抜けようとした。

「あ、動かないで！」

「はい？」

思わず足を止めて振り返る。するとシャッター音が響いた。呆氣にとられている奈美を差し置いて、伊沢は何枚もシャッターを押しまくっている。

しばらくして気が済んだのか、ニンマリ笑いながら、カメラを返しにきた。

「ありがとう。いやあ、いいカメラだね。すごく綺麗に写っていると思うよ」

「あの、写真が何か関係あるのですか？」

「まあね。いずれわかるから。お、いいものが落ちている」

奈美が困惑しているのにも気にせず、しゃがみ込み、何かを拾い上げる。そしてそれを奈美に見せた。

手のひらでようやく持てるくらいの割と大きめな石。よく見ればただの灰色一色ではなく、ほのかに煌めきがある。

「いい色だろ。この岩の欠片だ。どんなに時が過ぎても、大きな変化が起こらないのが石だ。そう、永久不変っていうもの。役に立つはずだから、持っているといい」

「わかりました。ありがとうございます」

繫累岩の欠片が奈美の手のひらに乗る。ほのかに温かいそれをぎゅっと握りしめた。

さて、赤い糸を関連があると思われるところを、二力所ほど回ったが、正直な話、奈美は伊沢が何をしたいのかよくわからなかった。水と石を手に入れて、何が起こるのか。

比較的険しい道で手に入れたものとはいえ、誰もが手に入れられる品である。だから手に入れただけで、赤い糸と絆の関係という、不可思議なものが変わるとは思えられない。

だが、そのようなことを抜きにすると、他の部員たちにも見て、感じてもらいたい景色でもあった。

眼下を見渡して、溜息を吐いてしまうことがある。この大自然が広がる山で、人間なんて本当に小さなものだということに。何百年もそこに置かれた岩、流れ続けている水、そして樹齢何百という木々。

人間が争いを起こして数日が経過するのと比べると、なんて長い期間なのだろうか。

時代を超えて、手に入れた水と石。絆とかと別にして、何かあるのかもしれないが、今はまだ半信半疑である。

「奈美ちゃん、最後のポイントに行こうか」

「そのポイントに行くことで、何かが変わるんですね」

「まあきっかけは作れるだろう。最後はまあ、繋ぐ人自信の問題」

「繋ぐ人とは？」

「現れるんだよ、赤い糸を繋ぐ人が。急がないとみんなが下山を開始してしまう。少し急ぐよ」

「わかりました」

伊沢は少し足を速く動かす。奈美もその速さに負けずと進み始める。

ふと、繋ぐ人とはいったいどんな人なのだろうか、考えていた巫女さんみたいな人か、それとも霊とかそういう類だろうか。その人自身にも興味があるし、糸が繋がりに、以前の通りに結びつきが戻れると思うと、自然と疲れはどこかに消え、足取りはしつかりしていった。

繫累岩から先の道は、急な勾配が続いていた。いよいよ登山という感じだ。足場がしつかりしていそうなところを探しつつ、滑らないように気をつけてさらに登る。

途中で登っていた石と石が大きく開いている場所があり、奈美は少し渡るのを躊躇っていた。それに対し伊沢は手を伸ばして来るよう促す。その行為に一回は手を引っ込めたが、意を決し握って飛び越え、無事に降り立った。

伊沢はただ微笑んだだけで、何事もなかったかのように進む。その後ろ姿をぼんやりと眺めた。

一瞬だけ力強く握られた感触がまだ残っている。あんな行動をすれば、彼は調子に乗って口を動かすと思っていたが、何も触れなかったのが、不思議であつた。

—— 本当に変な人。

だが、その言葉の意味合いは少しずつ変わっていた。

「それにしても聞かないんですね、私が何故赤い糸の繋がりを気にしているか」

不思議だつた。何気ない会話があつたが、奈美と赤い糸の関係は一度も聞いてきていない。質問に対し、伊沢は大きく背伸びをしなから答えた。

「何か切れるような事件でもあったんでしょ？　例えば、誰かの喧嘩とか」

一発で理由を当てられるという、虚を突かれて、立ち止ってしまふ。その様子を意外そうな顔で眺められる。

「何か変なことでも言った？」

「いえ、あまりにも当たっていたから驚いて。一緒に行動していた男子が二人、喧嘩をして、そのうちの一人が喧嘩をひと蹴りつけると、山を一人で登り始めて。それで今は彼を探している途中なんです」

「そうだったんだ。……なかなか嫌な思いをしたわけだ」

率直な感想を言われて、少し顔を俯かせた。嫌を通り越して、寂しかったのが本音である。

それ以後も、伊沢はそのことに関してはまったく触れようとしなかった。それは奈美の表情に無意識に出ている落ち込みように、彼なりに気遣った結果なのかもしれない。

五、絆美神の祠

しばらくして、看板が見てきた。山頂まであと何百メートルという案内板。それを見ると鈍くなった動きが軽くなる。

そんな場所まで来たとき、伊沢が嬉しそうな顔をして奈美を見た。「やっと着いた。あれが最後のポイント、絆美神きすなみがみの祠」

伊沢が少し横にずれて、奈美の視界の祠が入るようにした。

見れば、小さく可愛らしい祠が、太陽の光を浴びながら静かに佇んでいる。木々の間から漏れている絶妙な光を一身に受けており、もしあの祠が生き物であれば、とても快適な気分でそこにいるだろう。

内部がよく見えるところまで来ると、誰かが供えたのか、すでに枯れてしまった草花が置かれていた。伊沢はそれを丁寧に取り払い、周りの草木を少しだけ切った。こざっぱりしたような感じになる。

「ここは絆美神が祀られている場所なんだ。さらに上にある神社には絆美義神きすなみがみという、この波木山がメインとして祀っている神様の守り人として、他の祠に祀られている絆義神きすなみがみと共に産み落とされたんだ。ここだけじゃなく、この山には多くの祠や神社があり、神様がいる。たぶん通常の道を通るときもたくさん見えていると思う」

話を振られて、奈美は一年前に登ったときの山の様子を思い出す。中腹では小さな祠があり、それを話題に出しながら、歩いた記憶がある。首を縦に振り、伊沢の言葉に応えた。

「そしてここは絆の美しさを想い、導く女神さまが祀られている。だからきつと絆に対して正しい道標を導いてくれるはずだ。君たちの絆が本当のものなら戻るかもしれないし、偽りであつたのなら戻らないかもしれないが」

その言葉を聞いて、少しだけ不安な気持ちが浮かび上がってきた。秀と広樹、二人の結びつきが固いものなのか。

この部全体の結びつきは固いものなのか。

本当はあの赤い糸の繋がりは限りなく細くて、切れてしまったのは必然のことではないかと思うと、寒気がしてくる。

それを振り払うかのように、奈美は祠を懐かしそうに見入っている伊沢に疑問を投げかけた。

「それでここでその神様にでも会うつもりですか？」

すると伊沢は微笑を浮かべた。

「面白いことを言うんだね、奈美ちゃんは」

「違います。あなたの前振りからそういう風に思っただけです」

「そうか、それは悪かったね。言い方には気を付けるよ。まずはご挨拶とお願い事をしようか」

伊沢はリュックから、さつきくみ取った水を祠の前に置き、合掌をした。奈美も焦る気持ちを抑えて、それを真似し、渡された石を水の隣に置いて目を閉じ、手を合わせる。

一つの願いをただ一心に祈って――。

すべての繋がりが元通りに戻りますように――。

風もなく、音もなく、静かな空間。

何かが見えそうで、見えない状態が続いていた。

突然、チリンという鈴の音がその空間の中に鳴り響く。何度も何度も繰り返され、全身をその音が駆け巡る。何かを導くような鳴り方に、うつすらと目を開けた。

しかし開けた瞬間、音は聞こえなくなった。ただ耳に入ってくる音は、草木が風で揺れている音だけ。今の音は幻聴だったのだろうか。

だがそんな中、激しく草木が動かされる音が聞こえた。その方向にすぐさま見ると、数メートル先で何か大きなものが動いている。もしかして熊か、と心許ない持ち物で警戒した。

だがそこからは人が飛び出してきた。目を丸くして、啞然としている奈美たちに気にすることもなく、その人は背を向けて無心に先に通じる道を走り始める。

ほんの少しして、後ろ姿をよく見て我に戻った。その人に対して、

思わず大きな声を発する。

「秀！ 高瀬秀！」

叫ぶと、その人物を追いかけて始めた。伊沢が止めようとしたのに目もくれず。

必死に走り、秀と思われる人に追いつこうとする。

だがそこからは登り道であり、追いかけているのは走るのが得意な男の人。そんな人にある程度の距離が付いてから追いつけるわけがなかった。見る見るうちに差は開いていき、あっという間に背中が豆粒ほどになってしまう。

「お願いだから、待って、秀！」

息も切れ切れに声を出す。だが足下に注意を払っていなかった奈美は踏み場を間違えて、足を滑らしてしまった。息を吐く暇などなく、転がり落ちる。このまま下まで落ちるかと思えば、途中で何かによって止まった。

いや、誰かに止められたのだ。

目を開くと、大きな手をした人に抱えられていた。そしてその人の手の甲には擦り傷ができていた。

「まったく無茶もいいところなんだから。どこか痛むところはある？」

後ろから聞こえる、真剣な声。肩越しにその姿を見た。伊沢が身を挺して、奈美を止めてくれたのだ。

「だ、大丈夫です！ ありがとうございます！」

慌てて拘束から解放してもらい、立ち上がる。しかし急に左足に激痛が走り、再びしゃがみ込んでしまった。

「大丈夫じゃないだろう。足でも痛めた？」

触ろうとした手をあたふたと振り払った。

「だから大丈夫です。ちょっと慣れないことをしてしまったから――

――

「痛いんだろ？」

出会ったときのようなおどけた様子ではなく、真っ直ぐな視線を

突きつけられた。その目に意識が奪われると、隙を突かれて左足首を握られる。

「……っ痛」

「ほら、痛いじゃないか。足場を踏み違えて、その時に痛めたかもしれない。まずは冷やした方がいいが……。確かここを登りきって平坦な道に入ったところに、また別の湧き水があったはずだ。そこまで頑張つて登ろう」

「……わかりました。すみません、ご迷惑かけて」

「いいんだよ。僕も昔、そういうことをよくやっていたから」

伊沢に支えられて、奈美は再び立ち上がった。ゆっくり歩くことは一人でもどうにかできそうだが、登るとなつては少し苦しいかもしれない。

それを氣遣つてか、伊沢は先に進んで上手く立ち回ってくれる。

手を差し伸べたり、押し出してくれたり。そのおかげで、痛みもそこまで意識せずに登りきることができた。

そして少し歩くと、湧き水が出ている箇所に辿り着く。流量はあまり多いとは言えないが、足を触れるくらいの深さはあった。脇にあった石の上に腰を掛けさせられて、靴を脱いで左足を露わにする。少し腫れていたが、思ったほどではない。冷やすために、湧き水が出て川となるうとしている所に足を突っ込んだ。だんだんと冷たさが浸透していく。痛さも少しずつひいていった。

伊沢は奈美の足の様子を見まじと見ていたが、しばらくすると立ち上がり、奈美から少し離れて目を細めながら、ぽつりと声を漏らした。

「先の方に行つて様子を見て来る。たぶんもう少しで合流地点だから。何かあったら、大声で叫んでね」

「叫ぶって、普通は連絡先を教えるとかじゃないのですか」

「僕の携帯電話、電池切れで使えないんだ。だから叫んでね。それじゃ」

そう言い、軽く手を振ると、先へ行ってしまった。

その背中を見ながら、奈美は溜めてきたものを出すように深々と息を吐いた。

伊沢の行為に対して、申し訳ないという気持ちと同時に、その優しさと気遣いが本当に嬉しい。

きつとこれが部活内の人であつたら、無理して笑顔を繕いながら、助けなど頼らず進んだかもしれない。でも、彼はそんな行為をさせる前に、本音を吐き出させてくれる。

それに、少しは色々と頭の中に整理したい気分であつたため、一人になりたかつたのだ。

まともな休憩など、登り始めてからまだ取つていなかった。携帯電話で時刻を確認すると、もう昼も過ぎている。もちろん山頂への予定到着時刻も過ぎていた。

あれから特に連絡は入ってこない。秀の手がかりが得られ次第、連絡をすると言ってきた。つまりまだ何も得られていないということ。もしくは得られても、連絡を入れなかったか。もし後者としたら、正直考えたくもない。

電波が三本立っていない状態だつたが、着信履歴を開き、由宇に向けてリダイヤルボタンを押した。

数秒沈黙が走り、コール音が響く。何度も何度も響いたが、やがては留守番電話サービスに飛ばされた。肩をすくめながら、通話を切った。

出なかつたのはきつときつい傾斜を登っているからだと思い、足を冷やすことに専念する。

風が吹けば、葉は揺れ、その葉は隣と当たる。それがいくつも重なると、心が休まるような音を出していく。湧き水のせせらぎも聞こえて、自然の素晴らしさを、身を持って実感していた。

そんな静かな時間が過ぎていると、不意に他の音が耳に届く。それは祠の前でも聞いた、——そしてこの山に入る直前にも聞いた音と同じだった。

思い出したように、下ろしたリュックから細長く飛び出している

物を手に取り、引き抜いた。

それは鈴が付いている破魔矢。羽の部分が少し土で汚れているのは、さつき転がり落ちた時のものだろう。だが、よく折れなかったと思った。きつと丈夫なものでできているのだろう。

鈴の近くには、買った神社名を記された紙が下がっている。波木山神社と書かれており、頂上にあるのだ。

矢を少し揺らすと、チリンと鈴が響く。少しか細い音だが、その控えめな感じが気に入っている。

なんとなくしつかり握ると、ほのかに温かった、ただの矢であるはずなのに。

不思議な感覚に、息を吞んで、矢を食い入る様に見たが、それと同時に何事も無かったかのように、矢は冷たいものに戻ってしまっ

た。

「まさか矢が生きているとか言わないわよね」

冗談半分で言ったのに対して、誰も答えてはくれなかった。

わからないことを考えても埒が明かないので、矢のことは置いて、今までのことを少し整理してみた。

この波木山に入ってから突然見えるようになった赤い糸。伊沢が言うには、人と人との絆の結びつきを表すものらしい。それが切れたことによつて、秀と広樹は喧嘩をし始め、周りの人もあまり干渉しなかった。

その後、秀が団体から抜け出したため、三つに分かれて探すことになる。その途中で奈美は伊沢という、一見変わった人に出会った。それから絆を再び結ぶ手がかりとなる、紡糸川ほつしがわの水、繫累岩けいらいいわの欠片を手に入れた。その二つは今、伊沢が奈美のことを追いかける前に持つて来てくれたため、石の脇にある。

そして最後に訪れた絆美神きずなみがみの祠、あそこは結局何だったのだろうか。

繫ぐ人を導くとかそういうことを伊沢は言っていた。だが祈った後は、鈴の音が聞こえ、秀らしき人の後ろ姿を見た。それを追いか

けて、転がり落ちたという現在の状況。誰も絆を繋ぐ人など現れなかった。

簡単に赤い糸と様々な出来事を振り返ればこんなところだろう。特に抜けていることはないはずだが、何か頭のの中に引っかかっていた。見落としがちなことではあるが、何か大切なことを――。

伊沢に聞き出せば、もう少し何かが掴めるかもしれない。そう考えて、もやもやしたものは思考の片隅に置いておいた。

不意に彼と奈美を繋いでいる赤い糸に視線を下ろす。その線が出会った当初よりもはつきりと見えるような気がした。

他にも奈美の体からは色々な糸が出ているが、伊沢との糸は間違わないだろう。

「絆って、いったい何だろう。その単語を一つ取ってもいろいろとある気がする」

触れても、空を切ってしまう糸を突く真似をしながら、疑問を口にする。

ただ一緒にいるだけが、絆を強める唯一の行為ではないだろう。離れていても、切れないものはあるはずだ。

絆が切れる時は、お互いの信頼関係が失われた時だろうか。

意思の疎通が上手くいかなかった時だろうか。

それなら、絆の結びつきと呼ばれている赤い糸を繋いだとしても、根本的な解決にはならないのか。

いろいろと考えたが、何も結論などでない。ただ今は動かないと、何かをしていないと気が済まなかった。

正直面倒なことになったと奈美は当初は思ったが、今ではどうにか繋ぎたいという想いが強い。こんなにも部に対して真摯に考えているのは初めてかもしれない。その想いに気付いてくれている人なんていないだろうが、それは主張しない奈美も悪いかもしいい。

やがてほころびている派手なシャツを来た青年が戻ってくるのが見えた。気付けば、左足の痛みも大分ひいたようだ。

「調子は良くなった？」

「はい、良くなりました。これではらくは歩けると思います」

「それならよかった。少し固めるから足を差し出して」

伊沢はハンカチを取り出し、水から出した左足をしっかり結び始めた。すると痛かったものが固定されて、さらに楽になる。

「ありがとうございます。慣れていきますね」

「だから昔はよくやったんだって。休憩も終わったところで、さあ、行こうか」

手を差し伸ばされ、立ち上がるよう促す。それを微笑みながら、握り返し、再び奈美の足は地に降り立った。

六、奈美と奈義

「これからどこに行くんですか？」

歩くペースを落としてゐる伊沢の背中に奈美は声を投げかけた。

山頂の方に向かってゐるのはわかるが、そこから何がしたいのかよくわからない。

「山頂にある波木山神社に向かつてゐる。そろそろ離れてしまった人たちと合流するべきだろうからね」

「でも、今の状態で合流しても、まだ何も変わっていないじゃないですか。それに秀を捕まえられていない。何だかみんなと会つのが申し訳ない」

自嘲気味に返す。それを聞いた伊沢は奈美の隣まで下がってきた。「本当に何も変わっていない？」

「糸が繋がっている気配はありません。——あの、赤い糸を繋ぐために、今まで川や岩を通り、祠までお参りしたんですね。いったい何が目的だったんですか？」

そう問いつめたが、伊沢は微笑を浮かべただけだった。

「そのうちわかるから。短気は損気だよ、奈美ちゃん」

「短気ではありません。不明確なことが多すぎて、気になっているだけです」

「ねえ、時が解決してくれるってゐる話を聞いたことはない？」

「ありますよ。たいていの問題は時間が経てば解決してくれます。

まさかこの糸も時間が経てば解決してしまうとか、そんな馬鹿なことじゃありませんよね？」

もしそうだとすれば、今までの行為がすべて無駄になる。何もしなくても同じだなんて、考えたくない。

そして口を開かず、ただ黙っている青年に一番聞きたかったことを改めて聞いた。

「あなたはいったい何者なのですか？ どうして私やあなたには赤

い糸が見えるのですか？」

根本的なことを聞くと、急に伊沢は立ち止まった。

そして風が二人の間を吹き抜ける。

「……君と僕は同じ立場だつてことさ」

寂しそうな表情で、彼は奈美を見つめた。

「同じつて、何が……」

だが伊沢は奈美との会話を打ち切ると、急に道の先を注意深く見た。

「ねえ、あれはさつき君が追いかけた男？」

息を呑んでから、すぐに振り返る。見慣れたリュックとその後ろ姿を見て、また大声を出そうとした。しかしそれをやんわりと伊沢が遮る。勢いを削がれた奈美は伊沢を鋭く睨んだ。そして彼を無視して進もうとしたが、強い力で手を引つ張られた。

「な、何をするんですか！ 放してください」

「放したら君はまた走る。そんな風に怪我を悪化させることを見す見すと見逃せない」

「けど！」

「この先には他の道との合流地点がある。彼は他の人と接触するさ。焦るのはわかるけど、少しは落ち着こう」

「……すみません」

拳を作っていた手はいつしか開かれ、体から緊張感が抜ける。それを感じた伊沢も手を放した。そしてまた一歩ずつ進み始める。

だが突然浮かび上がった感情が言うことを聞かなかった。

目を閉じれば、そこには赤い糸が切れる光景が映る。

この部活のすべてがバラバラとなり、このまま終わってしまうのではないかと恐怖も感じた。

わかりあえない人たちの様子を見て、胸が苦しくなった。いや、わかりあえないのではなく、わかりあおうとしないことに、愕然としたのだ。

そしてあの場を必死に仲裁せず、ただ傍観者としてしか見ていな

く、その上逃げ出した奈美自身に腹が立っていた。

恐怖と切なさど苛立ちから、無意識のうちに頬を涙が伝っていた。慌てて手で拭いたが、幾度もなく流れ出てくる。

いろいろと溜めてきたものが出てしまっていた。

こんな姿、誰にも見られたくない、そう思っていると、伊沢は何も言わずに前に出て、奈美に背を見せる形で歩き始めている。

その行動に感謝をしながら、声を出さずにただ涙を流すだけ流した。

その間、何も話しかけられることなく、ただ黙々と前進していた。ぽっかりと心が空いてしまったような感覚に襲われたが、それも少しずつ戻りつつある。

ようやく流れるものが流れた頃、開けたところに出た。そこは道が三つに分かれている。どうやら合流地点らしい。

最後にしっかりと涙を拭き取ると、地面をじっと見ている伊沢に話かけた。

「どうしたんですか？」

「いや、団体が通った形跡でもあるかと思ったが、ちょっとわからなかった。しょうがない、とりあえず神社まで——」

伊沢の言葉を遮るかのように鈴の音が鳴り響いた。奈美は立ち止まっている。だから持っている破魔矢に付いている鈴が鳴るはずはない。だが、鈴の音は聞こえる。

よく聞き取れば、森の奥から鳴っているように感じた。まるでこっちに来いと導いているかのように。

伊沢もその音の方向に気づいたのか頷き、少し早歩きで向かう。着くと、そこには誰かがいた。光の当たり具合と木々に隠れているため、誰とは判断できなかったが、何かをしようと腕を伸ばしている。

いったい何をしているのかと思った矢先、人の影が消えた。

幻でも見たのかと思ったが、気が付くと伊沢が険しい形相をしな

から奈美の横を通り過ぎる。

それに反応した奈美も、怪我をしていることなど忘れて、駆け出した。

伊沢は人の影が消えたところに辿り着くと、しゃがみ込んで、下に向かつて手を伸ばした。

「そんな草木じゃなくて、僕の手には掴まって！」

叫ぶと、伊沢の体が前乗りになる。誰かが滑り落ちたのを助けようとしているのだ。追いついた奈美は、その人物を見て、啞然とした。

「秀！」

秀は険しい表情をしながら、呼ばれた方へと視線を向けた。彼の両足は宙を浮いている。一瞬で顔が真っ青になったが、すぐに救出作業を手伝おうと屈み込もうとした。だが、伊沢の声がそれを妨げた。

「君の力じゃ、足りない。誰か人を呼んできて！」

「でも誰も……」

「上に行けば神主さん、巫女さんもいる。とにかく早く！」

強い言いように、追い立てられながら人を探し始めた。合流地点に戻ると、どこかの道から話し声が聞こえる。その方向に向くと、入り口付近で分かれた広樹を始めとする部員たちがいたのだ。

広樹は奈美の姿を見ると、眉をひそめた。だがそんな行動にいちいち突っかかっている暇はない。左足の痛みが徐々に戻ってくるのを我慢して、駆け寄った。

「広樹！」

「何だよ、奈美。いったいどこで——」

「手を貸して。秀が崖から落ちそうなの！」

広樹の眉がぴくりと動いた。

「そうか、それは危ないことだな」

「思ったことはそれだけ？ 危険な状態なのよ、助けて！」

「どうして俺——」

「いい加減にしなさい！」

圧倒された声に、その場にいた全員が口を開くのをやめた。

「こんなところでつまらない意地を張ってどうするの。あなたとあれだけ時を共にした人が死にそうなの。そんな状態なのに何も思わないの？ 絆で結びあっているっていうのは、喧嘩しても、殴って傷つけあっても、何度でもやり直せる関係を言うのよ！」

広樹の瞳が大きく見開かれた。それ一瞥して、奈美は秀の元へと戻り始める。

足の痛みは確実に体力を削ぎ落としていた。進む速度は遅くなり、やや引きずりながら駆けていると、少し髪を茶に染めた男が脇を走り抜いていった。その男——広樹に続けと数名の男子が彼の後を追っている。

そして伊沢が屈み込んでいる場所に着くと、悪態を吐きつつも、秀の救出作業を手伝い始めた。大の男が数名がかりになれば、軽いものである。

すぐに秀は持ち上げられ、地上に戻ってこられた。崖から落ちるという、危機から脱することができたのである。呼吸は荒いが、特に異常はなさそうだ。

それを見届けると、奈美もほっとして座り込んでしまう。気付けば、奈美の脇では由宇が追いついており、足をじろじろと見てきた。「心配したよ、一人で秀を探しに行っちゃたから。それにしてもその足、怪我をしたのね。どうして連絡しなかったの」

「……したよ。連絡、一回入れた」

ぶっきらぼうに言うのと、由宇の目がパチパチと動いた。

「あ、ごめん。他の人と連絡を取ったりしていて」

どうやら気づいていなかったらしい。表情からして、意図的に無視するつもりはなかったようだ。そのことについて追求する気はなかったのだ、あまり触れないようにした。

はっとして意識を秀の方に向けると、広樹と対峙している。二人の表情は険しく、一触即発な様子だ。どのような展開になるか静か

に見守りつつも、止めるときは止められるよう準備は万全とする。
まず口を開いたのは秀だった。

「広樹……、ありがとう」

「礼を言うなら、あの人に言ったらどうだ」

いつのまにかその場から少し離れ、伊沢は秀たちに背を向けて、
服を整えていた。

「そうだな。けど、お前もいなかったら、二人とも落ちていたはず
だ」

「そもそも、何でこんなぎりぎりまで崖に近寄っているんだ。子供
だつてしないぞ」

広樹が深々と溜息を吐くと、秀は握りしめていた左手を開き、そ
こにあるものを見せたのだ。

それは写真であった。秀と広樹が笑顔でツーショットを撮られて
いる写真が。

「山の中を歩いていたら、急にこの写真が見たくなって、見ていた
ら風が吹いて、木の枝に引っかかってさ。取ろうとしたら、滑った」

「……お前、やっぱり馬鹿だろう。そんな写真、いくらでもデータ
で残っている」

「その通りだ。本当に目の前のことしか見えない、単純人間が上に
立っていて悪かったな」

そして二人は声を上げて笑った。含みもない純粹な笑いを。

その間に切れていた赤い糸が、少しずつお互いの糸に向かって伸
びていく。他の人たちと切れていた糸も伸び始めていた。

「——悪かった」

「何が？」

「さっき酷いことを言つて。お前に部長なんか務まるはずがないな
んて」

まあ秀にとって根幹的なことを広樹は言い放ったものだ。

ふとしたときに思つて飲み込んでいたことを、何かの拍子にでて
しまったのだろうか。

それともこの山の不思議な空気が無理矢理引き出してしまったのか。

どちらにしても、不可抗力のことだったのかもしれない。しかし、そんなことは世の中いつでもどこでも起こることだ。大事なのはその起こった後の行動だろう。

「いや、広樹の言っていることは半分正しかった。だから少し一人になって頭を冷やそうとしたんだ。そして思ったのは、俺は上に立つ立場としては、まだまだ未熟な部分がある。だから――」

姿勢を正して、視線を広樹だけでなく、後ろにいた奈美や由宇を始めとする、部員たちをざっと見渡した。

「助けてほしい。俺が立派に一人できるように。お前や部員たち、そして必死に一人で走り探しまわってくれた奈美がいれば、きっとこの部は繋がっていられるはずだから。お願いだ」

深々と礼をした。それを見た部員たちは、ざわざわと声を上げる。上に立つ者がそんな態度を取るなんて、例を見たことがないからだ。奈美が慌てて秀の顔を上げさせようとすると、その前に広樹が立ち上がった。

「まずは自分が頑張れよ。俺たちが付いて行くのはその後からだ」
頭を上げさせると、ふっと笑みを浮かべた。それにっられて秀の表情も緩む。そしてお互いにしっかりと右手で握り合う。

その瞬間、秀と広樹の赤い糸はしっかりと結びあった。その糸は前よりも太く、強固なものになっているようだ。

そして他の切れていた糸も伸びていき、それぞれが繋がり、また一本の糸となった。

赤い糸たちはまるで布のように広がる。その光景が奈美にとってほむしる微笑ましいことになっていた。

切れていたものが繋がると、その糸たちは少し霞んで見えるようになる。その光景に首を傾げた。今まではそういう現象がなかったのだ。

その理由を聞こうと、一番事情を知っていると思われる伊沢を見

た。まだ背を向けたままだ。さすがの彼も立場から自嘲して、この集団から離れているのだろ。その気持ちは有難いが、話したいこともあるので、立ちあがって聞こうとした。

だが、何の前触れもなく広樹と秀が怪訝な表情をしながら、伊沢の方へ振り返ったのだ。

「奈義^{なぎ}さん、そんなところで一人でいないで、こっちに來たらどうですか？」

「そうですね。俺の命の恩人なんですから、遠慮することないじゃないですか。奈義さんがいなかったら、俺、今頃、生きていないかもしれないのに」

その気軽な投げかけに、奈美は絶句した。

秀も広樹も、奈美の驚きなど意に反さず、伊沢を呼び続ける。

「奈義さん、久々に会ったのにどうしたんですか？　いつものおちやらせは——」

「秀、おちやらせとは心外なことを言うな。僕はいつだって真面目だ！」

伊沢ははつきりと言い放ち、頬を膨らませながら振り向き、二人をじろりと見る。その様子は、紛れもなく伊沢の姿。三人で談笑といかないまでも、親しく喋っている。それを見て、心の中で絶叫した。

——ちよつと待つて。何がどうなっているの！

呆然としてその様子を眺めていたが、ふと伊沢が奈美の方に視線を送った。

「そうだ、秀に広樹、奈美ちゃんが左足を怪我しているから、とりあえず神社の方まで連れて行ってくれないか？　僕だと彼女照れちやつて」

「照れていません！」

反射的に突っ込みを入れる。それをその場にいた全員が目丸くして、奈美を見てきた。集団の視線に気づき、頬を赤くする。

顔を伏せていると、やれやれと肩をすくめながら來たのは秀だっ

た。

「俺のせいだって聞いた。ごめんな。とりあえず背中乗るか？」

「……肩だけ貸して」

それだけぼつりと言った。支えられながら立ち上がらせてもらう。そつと奈美の左手を秀の右肩に乗せると、半ば足を引きずりながら歩き始める。見守っていた部員たちもその後が続けと、止めていた足を動かさず。

その様子を一番後ろから眺めていた伊沢奈義は、安堵した表情を浮かべて、その集団の後ろに付いて行った。

七、絆美義

それから十分も経たない所に、波木山神社なみぎやまはあった。そこまで大きいとは言えないが、山頂にあるにはしつかりとした造りである。

まずは参拝からと、手水を行って心身を清めていく。その冷たい水は紡糸川ほうしがわとはまた違った冷たさがあった。清めが全員済んだあと、神社の前に立ち並び、秀が代表して賽銭を納め、参拝をした。ただどしい参拝ではあったが、それでも全員でやることに意義があるのだと、奈美は思ったのだ。

そしてしばらく昼食兼休憩ということで、一度解散した。

奈美は近くのベンチに座らせられ、由宇を始めとして、秀や広樹に囲まれながら、足の具合を見せる。そして後ろのほうではいまだに奈美と視線を合わせようとしない、伊沢の姿があった。

伊沢によつて締められたハンカチを解いていくと、赤く腫れている左足首が表れる。それを見ると、由宇は心配そうな表情を浮かべた。

「意外に酷いじゃない。どうしてこんな怪我を……」

「秀を追いかけてようとして、足を滑らしたらしい。つまりこいつのせいだ」

「だから本当に悪かったって。まさか奈美があの場合にいて、しかも俺を追っかけているなんて知らなかったんだよ」

広樹が嫌みつたらしく言い、それを秀が必死に自己弁護しようとしている。いつもは広樹が責められる立場なのに、今日はそれが逆転しているようだ。

秀のことをかばおうかと思ったが、そのやり取りがどこか新鮮で面白かったので口は閉じておいた。

あの時、絆美神きずなみがみの祠で、秀の後ろ姿を見る前、目を閉じて、神経が祈りのほうに集中していたため、普通では彼の存在には気付かなかったはずだ。

だが突然聞こえた、鈴の音。それが現実へと呼び戻した。そして内心焦っていた奈美は秀を見た瞬間、我を忘れて追いかけて始めていたのだ。だから、はつきり言ってしまうえば、秀のせいではない。不思議な鈴の音と自己管理ができなかった奈美自身のせいである。

「とりあえずくだらない喧嘩してないでさ、きちんと応急処置しようよ。私、巫女さんに言つて、包帯とかもらつてくるから」

由宇がやれやれと肩をすくめながら、間に割って入り宿めようとした。しかし少し言葉の使い方を間違つたようで、二人はムツとした顔つきになる。

「全然くだらない。奈美の体に関わることだぞ」

「その話題に出されている本人がどうでもいいって顔つきをしているのに気付かないから、まだまだ子供なのよ。広樹、あなたも一緒に来なさい」

そう言つと広樹を道連れにして由宇は立ち上がり、二人で神社の脇にあるお守り売り場へと歩いて行つた。

溜息を吐きながら、秀を真正面から見た。殴り合いの怪我が頬に残つたりしているが、それ以外は元氣そうである。そんな彼の顔をまじまじと見ると、突然思い出し、ポケットからある物を取り出して渡した。

「これは俺の携帯？」

「喧嘩している時に落としたのよ。それがないと困ると思って、拾つておいたの」

「そうか、ありがとう。助かったよ」

救出された時とはまた別の安堵の表情を浮かべていた。携帯電話という存在も、現代の世の中では繋ぐものの一つかもしれない。

ようやく落ち着いたところで、奈美はちらつと秀の後ろを見てから、ずっと聞きたかつた事実を尋ねた。

「ねえ、あの人、後ろにいる派手なシャツを着ているお兄さんを知っているみたいだけど、どういう関係なの？」

伊沢のことである。あの何気ない会話が、奈美の頭の中から離れ

られなかったのだ。秀と広樹はこの人を知っている。おそらく本当の姿を。

秀ははっとした顔を見ると、ああと声を漏らした。

「あ、そうか、俺と広樹しか知らないんだ。結構前の人だから」

「だから誰？」

前振りはいいから早く言ってほしい。若干苛立ちながら待っていると、慌てて質問に答えた。

「四年前に大学を卒業した、部活の先輩だよ。つまり五歳差の先輩。奈義さん、確か今年で二十五歳でしたっけ？」

「ああ。この前、誕生日を向かえた」

伊沢は観念したかのように、奈美たちに近づいてきた。腕を組みながら立っている姿は、なかなか様になっている。

「それにしても奈美、一緒にいたのに素性を聞かなかったのか？」

秀が訝しげな目で見てくる。

「聞いたわよ。でも適当にはぐらかされて言うから」

「そんな人と一緒にずっと俺を探していたのか？ まあ嬉しいんだけど、もう少し警戒心くらい持ったらどうだ」

「もちろん持っていました。けどいろいろと物知りだったから、つい……」

「まあ、この人、見た目は奇人だけど、中身はいい人だから、つい心を許しちゃうよな。それにしても奈義さん、どうしてここにいるんですか？ 失恋でもして、一人で寂しく登山ですか？」

秀は哀れみの目で見たが、伊沢は堂々と胸を張って言い返す。

「一人で登山も寂しくないぞ。いいじゃないか、急に山の空気に触れなくなったんだよ。おかげで面白いものが手に入った」

そう言うのと、視線を奈美の方に寄越した。山の途中で得たものを見せると言うのか。その意図に気づくと、リュックから紡糸川の水が入ったペットボトルと、繫累岩で拾った岩の欠片を広げて見せた。それを興味津々で秀は見入る。

「綺麗な水だ。湧き水ですか？ そんな場所、見たことないな。あ

と石もいい色ですね」

「写真もあるぞ。これまたいい岩だから」

奈美がそつとデジカメを差し出すと、それをじつと見る。そして感嘆の声を上げた。

「すごく絵になっている写真ですね。どこの道ですか？ 俺、いろいろな所を歩き回っていたけど、見たことがないです」

「教えてもいいが、少し道なりが険しい。そうだ、奈美ちゃんが持っている破魔矢を納めて来てくれないか？ 彼女、歩くのが辛そうだから。それをしてくれたら教えるよ。帰りにでもみんなで行ってみるといい。きっといい思い出になるはずだ」

「本当ですか？ わかりました。奈美、矢を貸して」

奈美は突然話題に振られた破魔矢を慌てて取り出した。鈴の音がささやかに鳴っている。それを秀の手元に乗せると、一目散に納めどころへと走って行った。

そして破魔矢が奈美の元へと離れた瞬間、視界に広がっていた赤い糸は消え去ったのだ。その光景に対して、目を見はった。あれだけしつこく見えていたものが、無くなったとは。見えなくなったことは嬉しいが、これまた突然過ぎて驚いてしまう。

「赤い糸はもう見えない？」

そう優しく語りかけてくる伊沢の方にゆっくりと顔を向けた。

「は、はい……。いつたいどうして……」

「赤い糸が見えていたのは破魔矢のせいさ。五年前もそうだった」
昔を懐かしむかのような表情をしながら、奈美の右隣に腰を下ろした。

「五年前、奈美ちゃんと同じ大学三年生の時、僕たちの代も登山の計画を立てて、実行をしたんだ。その時、ずつと部室に飾られていた破魔矢が気になっていたので、それを納めるのも頭に入れて。したら山に入った瞬間、僕の視界にも赤い糸が広がったわけさ。おまけに今回みたく派手に糸が切れて、本当に部の存続まで疑われた状態になったよ」

くすつと笑いながら、過去を振り返っている。

「僕もどうにかしようと奮闘して、結果的には丸く治まった。そして破魔矢を納めたら糸が消えたというわけさ。不思議に思っ、その後、先輩方を回って、過去にそういう妙な現象がないかと聞きこんだ。そしたら五年おきくらいに、波木山と破魔矢が関係している出来事が起こっているとわかった。ついでに言うと、人々の繋がり危機もね。そこでまあ、あの現象に対して、一人で立ち向かうのはちょっと厳しいかなって思っ、今回は僕もひっそりと付いてきたわけさ。まあ役に立たなかったみたいだけど」

明かされた事実には奈美はただただ啞然としてしまふ。何となくではあるが、欠けていたものがはめられたようだ。

「役に立たないなんて、十分助かりましたよ。ありがとうございます。そして私のためにご迷惑をかけて、すみません。けどそんなことがあったのなら、どうして破魔矢を一目散に納めようと言っ、れなかったのですか？」

「何事にも過程が必要ってことだよ」

奈美の元に戻ってくる秀や広樹たちを見ると、伊沢は立ち上がった。

「――絆を繋ぐ人は存在する。けど本当に存在するかどうかは、その人がどういう行動をするかによるんだ。奈美ちゃんの想いは、きっとみんなが背中から受け取っていると思うよ」

その言葉に思わず胸が熱くなった。誰も言わなかったことを真正面から言ってくれることに。

伊沢は大きな手で奈美の肩を何度か叩き、最後に微笑んでから離れた。

その後ろ姿によって奈美はこの部の絆を繋ぐために、ここまで導かれたとずっと思っ、いた。しかし本当に導いてくれたものは、奈美自身の気持ちの問題だったのかもしれない。

あの出来事をきっかけとして、様々なことを考えた。そして辿り着いたのは、人と人の繋がり大切さという純粋な想い。それを知

ることができ、実際に動き、言葉ではつきりと言いつつたことは、きつとこれからを導く糸に繋がるのだろう。

いつしか空を覆っていた雲はなくなり、色鮮やかな青空が広がっている。

それと共に、太陽の光も奈美たちを明るく照らしていた。

了

七、絆美義（後書き）

最後までお読み頂き、ありがとうございました！

ほんのりファンタジーな内容がありつつも、現実世界の物語となりましたが、どうでしたでしょうか？

短編で、大学生を主人公に、そして現実からあまりにもかけ離れない内容にしようとした結果、このような内容になりました。

さて、この小説の舞台である、波木山は間接的にある山をイメージして書きました。様々なポイントもその山にあるものを念頭にしています。実際に神話も絡んでいる山です。

私も登山は行事等でしか登らない人ですが、調べてみると色々逸話があることがわかりました。そういうことを知ってから、登ったりしてみるとさらにいいかもしれませんね。

本当にお読み頂き、ありがとうございました。

この小説を通じて何かを感じ取って頂ければ幸いです。

今後もさらによりよいものが書けるよう頑張りたいと思います。

よろしければ、また別の作品で会えますように――。

桐谷瑞香（二〇一〇・〇九・〇七）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2764n/>

キズナミギ —絆美義—

2010年12月12日22時55分発行